

恩地孝四郎の装本と芸術

桑原規子

恩地孝四郎の装幀本を集大成した『恩地孝四郎装本の業』（1982年）が刊行されてから、すでに四半世紀以上が経った。数多くのカラー図版と「恩地孝四郎装幀作品カタログ」を収めた同書は、出版当時、恩地の装本家としての仕事を通観できる貴重な資料集としてばかりでなく、恩地研究の新たな時代の幕開けを予兆させる画期的なものと思われた。

実際、この本が刊行された1980年代以降、油絵など新資料の発見や恩地展の開催、著作集の出版が相次ぎ、恩地孝四郎研究は飛躍的に進展し、新たな作家像を現出させることになった。

たとえば1983年には、自宅アトリエ奥に仕舞いこまれていた油絵が「恩地孝四郎遺作展—油絵を中心として—」（ギャラリージェイコ）で公開され、版画家としてのみ語られてきた彼が、実は岸田劉生や萬鉄五郎、東郷青児と同じく二科会に出品し、大正期、注目された新進油絵画家であったことが判明する。

1992年には、絶版となっていた著作『工房雑記』（1942年）、『本の美術』（1952年）、『日本の現代版画』（1953年）に雑誌や新聞掲載の美術論を収録した『恩地孝四郎版画芸術論集 抽象の表情』『恩地孝四郎装幀美術論集 装本の使命』の2巻（阿部出版）が刊行され、恩地が鋭い洞察力を備えた理論家、啓蒙家であったことが広く再認識された。

さらに1994年に、「恩地孝四郎 色と形の詩人展」（横浜美術館・宮城県美術館・和歌山県立近代美術館）で初期から晩年までの版画作品とともに、油絵、装幀、写真、オブジェなどが一堂に展示され、恩地を多様な芸術領域を越境して活動した芸術家として、その全体像を捉えなおそうとする機運がおこった。

こうした恩地研究の進展、恩地像見直しの背景には、むしろ1980年代以降、日本近代美術に対する見直しや再検討が盛んに行われてきたこと、とりわけ版画や新興写真、グラフィックデザインなど、従来の美術史では顧みられることの少なかったジャンルの美術研究が進められてきたという状況がある。たとえば、1910年代から1930年代までの美術を3回の展覧会で再考した「20世紀日本美術再見」（三重県立美術館1995～1999年）、1900年から1950年までの版画を5回に分けて紹介した連続展「日本の版画」（千葉市美術館1997～2008年）、昭和戦前期の美術家の写真に焦点を当てた「モダニズムの光跡 恩地孝四郎・権原治・瑛九」（東京国立近代美術館フィルムセンター1997年）など、数多くの企画展で恩地の版画や写真が取り上げられた。

また、日本の近代美術史研究が、美術だけでなく、同時代の文学・音楽・舞台美術・映画など他領域の芸術との境界を越えた総合的研究へと向かっているのも、恩地芸術の再検討を促した要因といえよう。「モガ・モボ1910-1935」展（神奈川県立近代美術館、Art Gallery of New South Wales 1998年）では、恩地の版画、詩画集、装幀、人形、レリーフがまとめて展覧され、「ダンス！20世紀初頭の美術と舞踊」展（栃木県立美術館2003年）では、鶴見花月園少女歌劇のためにデザインした舞台の写真が展示された。これらはまさしく、瀬木慎一氏が指摘したように、恩地孝四郎がいかにも多面的な芸術家であったかを証明するものである。

では、このような『装本の業』刊行から現在に至るまでの28年間に発掘され、再編されてきた恩地孝四郎像の中で、いま一度、装本のしめる位置とその役割を捉え直すならば、どのような姿が浮